

介護福祉士・保育士資格取得後の就労実態  
—専攻科介護福祉専攻卒業生のアンケート調査から—

須 江 裕 子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第61号抜刷）

報告・資料・研究ノート

## 介護福祉士・保育士資格取得後の就労実態 —専攻科介護福祉専攻卒業生のアンケート調査から—

Employment realities after acquiring care worker/childminder qualifications  
—An investigation by graduates of the care and welfare department—

須江 裕子<sup>1)†</sup>

キーワード：介護福祉士、保育士、卒業生、雇用形態、就労継続、離職、転職、満足度

### 1. はじめに

日本は世界に例を見ないスピードで高齢化が進み、平成26年には高齢化率26%<sup>1)</sup>となった。平成27年6月厚生労働省の推計<sup>2)</sup>では2025年には253万人の介護人材が必要になるとし、現状からみて37.7万人の介護人材確保が必要である。若年者人口の減少、介護ニーズの高度化・多様化等、現在の介護人材にかかる課題を踏まえ国は、現行の専門性が混在して役割が不明確な「まんじゅう型」から、人材のすそ野の拡大を進め、多様な人材の参入促進を図ると共に質の向上を促し山を高くした「富士山型」へと機能分化を進めている。その中で、介護福祉士には介護現場の中核を担う人材として期待が増大している。

本学専攻科は創設から14年目を迎え、約230名の卒業生を送り出している。介護福祉士・保育士のダブルライセンスを持つ卒業生が、それぞれの資格を活かしながらどのように就労しているのか、実態を知り、今後の本学における介護福祉士養成教育に生かすことを目的に卒業生へ対して就労実態についてのアンケート調査を実施した。その結果を報告する。

### 2. 調査方法

- 1) 対象：本学専攻科1期生（平成14年度卒）から11期生（平成24年度卒）までの卒業生200名
- 2) 方法：質問紙調査法（郵送によるアンケート調査）

i)† 美作大学短期大学部幼児教育学科

3) 調査期間：平成26年2月18日～2月28日

4) 調査項目は表1に示した。

### 3. 結果及び考察

アンケートの回収率は56%（112名）であった。4通は宛先不明で返送された。

1) 属性について

性別は男性17%（19名）、女性83%（93名）と圧倒的に女性が多い。本学専攻科創設当時は女子短期大学であり、2年目の平成15年度より共学化となった。専攻科には平成17年度（4期生）に初めて男子学生が入学した。

年齢別では26～30歳が53.6%（60名）と最も多く、次いで22～25歳が22.3%（25名）、31～35歳15.2%（17名）、社会人入学に値する36歳以上が8.9%（10名）の順に多かった。

職種は兼務もあるため複数回答とし、図1に示した。述べ回答人数116名のうち、介護福祉士41.4%（48名）が最も多く、次に保育士23.3%（27名）であった。その他には、生活相談員4.3%（5名）、生活支援員3.5%（4名）、幼稚園教諭3.4%（4名）、ケアマネージャー1.7%（2名）、その他6%（7名）、無職が16.4%（19名）であった。兼務している者は4名あり、その内訳は介護福祉士と生活相談員の兼務3名、介護福祉士と幼稚園教諭のパート掛けもちが1名であった。通所介護事業所の人員基準では生活相談員が必置であ

り、その資格要件の1つに社会福祉主事任用資格がある。本学の卒業生は概ね社会福祉主事任用資格を取得しており、この資格が通所介護事業所での採用に有利となる。兼務3名の勤務先はいずれも通所介護事業所である。

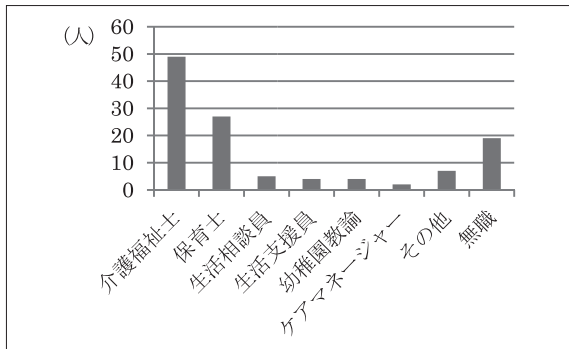


図1 職種

職場は図2に示す通り、保育園25.8% (24名)が最も多く、次いで介護老人福祉施設14% (13名)、介護老人保健施設10.8% (10名)、障害者支援施設7.5% (7名)、病院6.5% (6名)、通所介護5.4% (5名)、小規模多機能・幼稚園がそれぞれ4.3% (4名)、グループホーム3.2% (3名)、訪問介護2.2% (2名)、その他16% (14名)であった。この結果から、介護福祉士資格及び保育士資格を活かした専門職種が77.7% (87名)と大半を占めることが分かる。保育士としての勤務先は保育園が中心となるが、介護福祉士は高齢者関係・障害児者関係・医療関係と多分野に渡るため数値が分かれる結果となった。その他では、内職・自営業・営業・一般企業・病院受付・学生(専門学校)

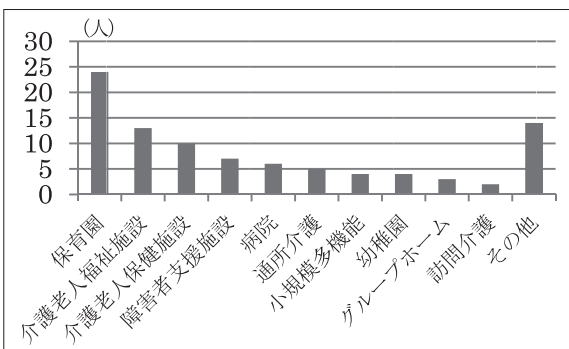


図2 職場

等の回答があった。

雇用形態は図3に示すように正規職員57% (64名)が最も多く、次いで非正規職員(常勤)が11% (12名)、非正規職員(パート)6% (7名)、その他1% (1名)、記述なし8% (9名)であった。雇用形態と職種の関係でみると、介護福祉士(生活支援員及び生活相談員を含む)は正規職員が80.4%と大半を占めるが、保育士(幼稚園教諭を含む)では正規職員が56.7%に留まり、ここに大きく差が開いた。

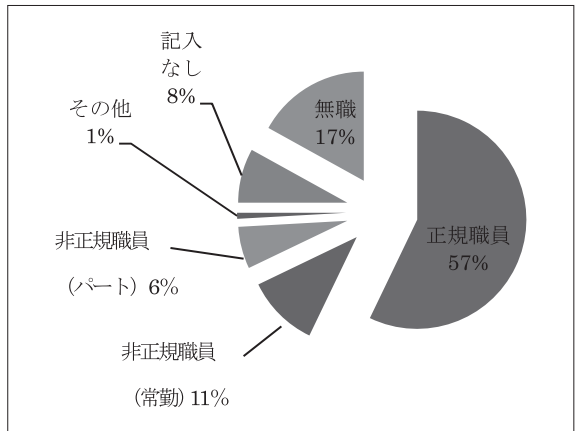


図3 雇用形態

## 2) 就労状況について

卒業年度別の初職の継続状況を見ると、図4の通り、勤務経験7年となる4期生以前で離職経験のあるものが半数を超える。また、勤務経験4年以下となる8期生以降では離職者は少ない。11年間の調査対象期間のうち最も長い継続年数は10年で、2期生に1名であった。

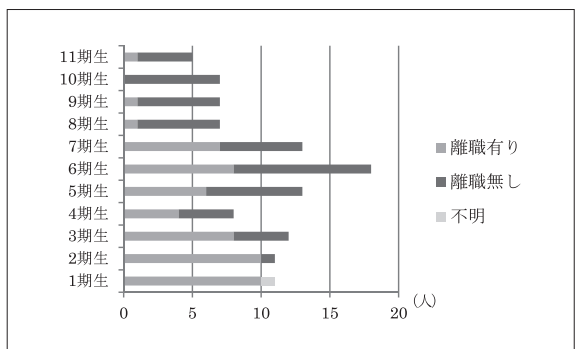


図4 卒業年度別初職の継続状況

雇用形態別に離職の有無をみると、介護福祉士のうち「離職なし」の正規雇用が88.6%（31名）、非正規雇用が11.4%（4名）、保育士のうち「離職なし」の正規雇用72.2%（13名）、非正規雇用27.8%（5名）であることから、継続して勤務しているのは介護福祉士の正規雇用が多いと言える。

次に、現在就労中の93名のうち、仕事の満足度は図5の通り、満足6.5%（6名）、やや満足37.6%（35名）、普通26.9%（25名）、やや不満24.7%（23名）、不満足が4.3%（4名）であった。

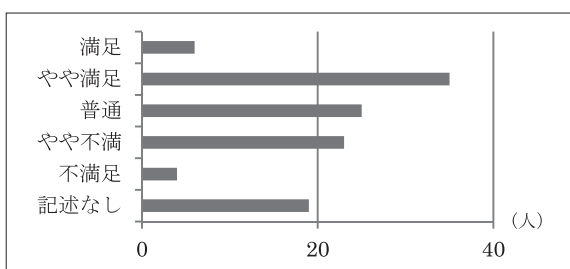


図5 仕事の満足度

職種別に満足している点を見ると、介護福祉士では、「自分がしたい仕事が出来ている」「責任のある仕事に就いている」「求められている」などがあげられた。反対に、「給与が低い」「人数が少なく負担が大きい」「体力的に仕事がつい」「人事異動が多い」という不満を抱えている。保育士で満足している点は、「子供たちがかわいい」「元々志望していた保育士として子供たちと関われる」「忙しいが充実している」など、不満のある点は、「サービス残業の多さ」「給料の安さ」「責任の大きさ」「臨時採用であること」などが挙げられた。

現在の職場での就労継続の意向については、図6の通り、「可能な限り続けたい」が最も多く54.8%（51名）、次いで「分からない」が21.5%（20名）、「今の職種を離れたくない」が8.6%（8名）、「別な職場に移って現在の仕事を続けたい」が7.5%（7名）、「転職あるいは再就職が決まっている」が3.2%（3名）、記述なしが4.3%（4名）あった。「可能な限り続けたい」と「別な職場に移って現在の仕事を続けたい」を合わ

せると、6割以上のものが現在の仕事を続けたいとの結果から、介護福祉士・保育士の資格取得が、将来に渡って専門職への就労意欲につながるものと思われる。

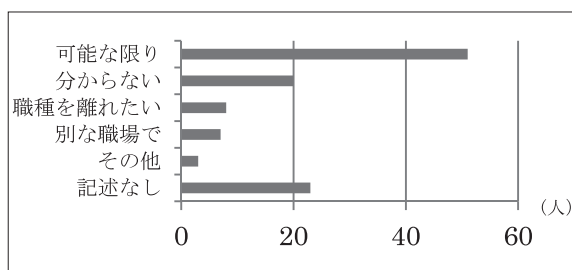


図6 就労継続の意向

平成26年度に行われた日本介護福祉士養成施設協会による卒業生の離職状況に関する調査<sup>3)</sup>によると、卒業後1年間の離職率は3%という結果に対し、同年、介護労働安定センターの実施<sup>4)</sup>した介護職の1年間の離職率は16.5%と大幅な差がみられた。このことから、介護福祉士の専門教育が卒業後の就労継続に与える影響は大きいと思われる。

転職の経験は37.5%（42名）あった。また、転職の回数は1回が19.6%（22名）、2回は11.6%（13名）、3回が5.6%（6名）、4回以上が0.9%（1名）であった。転職経験者延べ数70名の転職パターンとしては、職種変更を伴わない介護職から介護職への転職が28名、保育職から保育職へは14名あった。また、職種変更を伴う転職経験者延べ数は、保育職から介護職への転職が6名、介護職から保育職への転職は4名あった。その他、事務・自営業・営業・製造業・飲食店など他の職種の絡む転職は18名あった。転職の理由として最も多いのは結婚・出産・子育てが27.1%（19名）、次いで給与面・正職登用・方針の相違・体調不良がそれぞれ7.1%（5名）、人間関係・重労働・家庭の事情がそれぞれ5.7%（4名）資格を活かすため・任期満了がそれぞれ4.3%（3名）、その他8.6%（6名）、記入なし10%（7名）であった。現在無職19名のうち、退職の理由では結婚・出産・子育てが84.2%（16名）と大半を占めた。その他、体調不良・任期満了・金銭面の不安がそれぞれ5.5%（1名）であった。復職の

際重視することについては、子育てを中心とした勤務体系・給与面の充実・身体への負担の少ないこと・人間関係などがあげられた。

これらのことから、結婚しても子育てしながらでも資格を活かした仕事を継続していけるような職場環境づくりが必要であると言える。介護職場においては転職により、後進の育成をすべき中核的な人材が明らかに不足しているため、組織的なキャリアアップの仕組みが構築できなくなっている<sup>5)</sup>。また、職場環境の人間関係・給与面・仕事内容・職場の経営方針との相違が、仕事のやりがいをなくしてしまう原因の一つとなり、それに加え、結婚・出産・育児の節目に離職や転職に至るケースが多くなるとされる。今後は、個々のライフスタイルに対応した柔軟な雇用形態と多様な支援体制の充実が求められる。さらに、国家資格である介護福祉士に対する社会的な評価に見合う処遇が確保される仕組みを構築する必要がある。

### 3) 介護福祉士と保育士のダブルライセンスについて

介護分野と保育分野の両方の就労経験がある者は16% (18名)であった。その中で、「職種を変えたことで満足したか」については、「非常にそう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると83% (15名)と高い数値が出た。これは介護福祉士と保育士のダブルライセンスが有効に作用していると言える。介護・保育両分野に渡る就労経験者は少ないが、職種転換した者の満足度は高い。将来的に両方の資格を職業として活用できるかどうかは別として、ダブルライセンスを持つことによって、就職先の幅が拡大することや、自分の置かれた環境や立場に合わせて職種転換ができる強みを持つことになる。

次に、介護分野の就労経験者70名のうち、資格取得によるメリットとして感じていること(複数回答)では図7の通り、「正規職員として採用された」が67% (47名)と最も多くみられた。次いで、「給与や手当に反映された」45.7% (32名)、「知識やスキルが体系化された」37.1% (26名)、「就職や転職に有利」が34.3% (24名)あった。

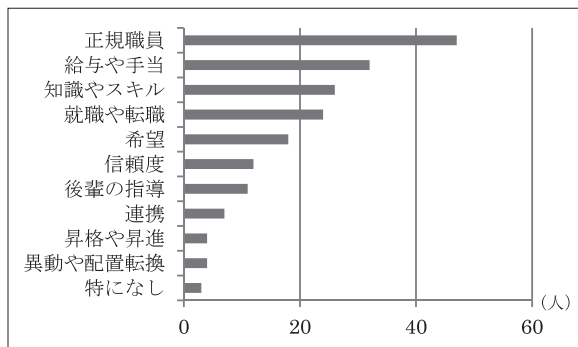


図7 介護福祉士資格のメリット (70名)

一方、保育分野の就労経験者50名のうち、資格取得によるメリット(複数回答)は、図8の通り、「希望していた職種に就くことができた」40% (20名)、「就職や転職に有利」が36% (18名)、「知識やスキルが体系化された」が34% (17名)あった。

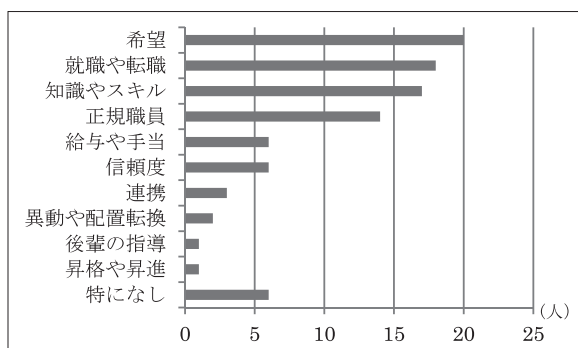


図8 保育士資格のメリット (50名)

介護福祉士のメリットとしては、正規職員として採用され、安定した給与や手当が得られることが上位にあげられる一方で、保育士資格の最大のメリットは希望していた職種に就くことにある。これは、専攻科の入学要件として、保育士資格取得者であることと関連性が高いと思われる。幼いころから保育士になることを夢として保育士資格を取得後、専攻科で介護福祉士の国家資格を取得する。ダブルライセンスを取得し、学生は保育職か介護職かどちらかを就職先として選択することが可能となる。その際には「ずっと憧れてきた保育士として、まず就職したい」と保育士を選択す

るものや、「元々介護がしたかった」、「専攻科で学ぶうちに介護に進みたくなった」、「両方の資格を取って、自分に向いている方向を考えたい」など選択の幅があるが故の悩みも多くなる。さらには、専門外の職業に目を向けることもある。しかし、卒業生は高齢のため就職しなかった1名を除き、現在まで全員が保育・介護の専門職として就職している。次に、「知識やスキルが体系化された」が両分野においてメリットの上位に挙げられたことから、在学中の基礎教育が現場経験を積むことによって深められていると推察される。

また、保育分野では2%（1名）であった「後輩等の指導に役だった」が介護分野では15.7%（11名）みられた。役職の有無で見ると、現在役職のある17名のうち介護職は15名、保育職は2名で、それぞれリーダー・サブリーダー・主任・責任者等の役職を担っている。特に、介護職で規模の小さな職場では有資格者が入職すると勤務年数の浅いうちから役職に抜擢される場合も少なくない。この点から見ても、現場における介護福祉士の期待の高さがうかがえる。一方で、経験の未熟なうちに役職ある立場になることが離職につながるリスクとなることも危惧される。

#### 4. まとめ

今回の就労実態調査から以下のことが明らかになった。

- 1) 介護福祉士として勤務するものが41.1%、保育士が23.3%、その他の専門職を含めると全体の77.7%が介護福祉士・保育士の資格を活かした専門職として仕事に携わっている。
- 2) 介護福祉士は正規職員が8割を超える一方で保育士は6割未満である。継続勤務が多いのは介護福祉士の正規雇用である。
- 3) 結婚・出産・子育てにより退職や転職に至るケースが多いが、転職や再就職に当たってはライフスタイルに合わせて介護福祉士・保育士の資格を活かしている。
- 4) 介護・保育分野の専門職として役職を持ち、責任ある立場で後輩の指導にあたるケースも多い。

これらの結果から、卒業生が介護福祉士を志したことを誇りに感じ、生涯に渡って長く歩み続けられるよう、専門職としての社会的評価を上げるため努力を続けていきたい。また、介護現場の中核を担う存在としての介護福祉士を養成していくことが求められるが、その専門性を明確化していく上で養成校の役割は大きいと考える。一人でも多くの卒業生を介護福祉士として社会に送り出すための教育活動を継続していきたい。

#### 謝辞

今回の調査にご協力いただいた卒業生の皆様に深謝いたします。

#### 参考文献

- 1) 「平成27年度版高齢社会白書」内閣府
- 2) 「2025年に向けた介護人材にかかる需給推計（確定値）について（平成27年6月24日厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室）」
- 3) 日本介護福祉士養成施設協会「養成施設卒業生の離職（在職）状況に関する調査」平成26年
- 4) 介護労働安定センター「平成26年度介護労働実態調査」
- 5) 日本介護福祉士会「第7回介護福祉士の就労実態と専門性の意識に関する調査報告書」平成19年

表1 アンケート調査項目

I 現在の状況について	
1. 年齢	( ) 歳・( ) 年卒
2. 性別	(男・女)
3. 現在の職業について	職種(介護福祉士・生活支援員・生活相談員・ケアマネージャー・保育士・幼稚園教諭・無職・その他「 」) 雇用形態(正規職員・非正規職員[常勤]・非正規職員[パート]・その他「 」)
4. 職場について	介護老人福祉施設・介護老人保健施設・障害者支援施設・病院・通所介護・通所リハビリ・グループホーム・小規模多機能・訪問介護・保育園・幼稚園・その他「 」
5. 役職等の有無	あり(役職名:リーダー・主任・責任者・実習指導担当者・その他「 」) ・なし
6. 卒業後取得した資格	ケアマネージャー・その他「 」・なし
II 就労状況について	
1. 転職について	専攻科卒業後の転職 (あり・なし) 転職の回数( )回 転職の経歴( )から( )へ転職、その理由( )
2. 退職について	現在無職である(はい・いいえ) 退職の理由( ) 今後の復職予定(あり・なし) 復職の際重視すること( )
3. 現在の仕事の満足度	満足・やや満足・普通・やや不満・不満足 満足している点( ) 不満がある点( )
4. 就労継続の意向	現在の職場で可能な限り仕事を続けたい・別な職場に移って現在の仕事を続けたい・今の職種から離れたい・分からない
III ダブルライセンスについて	
1. 介護・保育両方の経験	あり・なし
2. 職種変更に対する不安	非常にそう思う・どちらかといえばそう思う・どちらとも言えない・どちらかといえばそう思わない・全くそう思わない
3. 職種変更による満足度	非常にそう思う・どちらかといえばそう思う・どちらとも言えない・どちらかといえばそう思わない・全くそう思わない
4. 資格取得によるメリット (介護系経験者・保育系経験者別)	知識やスキルが体系化された・給与や手当に反映された・昇格や昇進につながった・正規職員として採用された・法人内の移動や配置転換に役立った・就職や転職の際に有利だった・希望していた職種に就くことが出来た・家族からの信頼度が上がった・他職種との連携がしやすくなった・後輩等の指導に役立った・その他「 」・特になし